

し

え

ん

便

り

26年9月
発行

和歌山県立みくまの支援学校 支援部

Q&A

ころんときどうすればいいかなあ？

? ころんで泣いている〇〇君。どこが痛いのか聞いてもオウム返しをするばかり。



A 絆創膏や冷えびたを見せて、「どこにはる？」と聞いてみる。絆創膏は子どもによってははげがの特効薬、おまじないのようです。ことばの意味の理解が弱い子どもにとっては、やはり見ることが理解の助けになり、自分の痛いところに持っていく行動につながりやすくなります。

? 遠足のお話や、好きなものを聞いても答えられない〇〇さん。



A 経験したと思われること、好きなものを、写真やイラストカードにしていくつか用意して見せる。子どもはそのカードをヒントにして、話せることがあります。

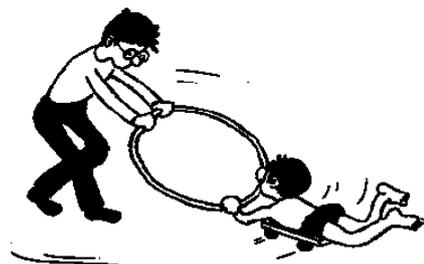
子どもさんによって様々なアプローチのしかたがありますが、参考にしてみてくださいね。(川上)

参考文献 : 「気になる子どもの支援ハンドブック」橋本正巳編集
「気になる子の保育がうまくいく方法」若林千種著

コラム

いま障害児を取り巻く環境は大きく変わってきています。たくさんの施設ができ、実践面でも科学的な研究が進み、教育方法は多種多様になってきました。

でも私は、ときとして子どもの気持ちがわからなくなることがあります。そんなとき障害児教育の先駆者である近藤益雄の著書『この子らと生きて』(大月書店)を読み返すことにしています。その実践は大きなヒュー



マニズムに貫かれています。(どの子も伸びる。子どもと大人は同じ発達の道筋をたどる存在だということ。) 時代は変わっても、子どもの多様な価値観を認め合うことが大切です。そして一番大切なのは保護者のみなさんと手をつなぎ教育を営んでいかなければならないということだと、いま感じています。(岸)